

## 論文の要旨

論文題目 前川國男の屋上庭園に関する研究 (Study on the Roof Garden by Kunio Mayekawa)

塚野 路哉

### 1. 研究の目的

前川國男(1905-1986)の建築作品は、師であるル・コルビュジェ(Le Corbusier, 1887-1965)からの影響が度々指摘され、また、前川國男自身も、設計活動を通してル・コルビュジェが提唱するドミノ(Dom-ino, 1914)に影響を受け続けていると述べている。ただし、前川國男は西欧の近代建築語彙を日本の環境へ置換しようとする一方、建築様式と環境との不可分性にも着眼を置き、単なる模倣ではない受容のありかたを模索している。

そのため、ドミノを構成原理とする「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1929)」に関しても、全てをそのまま受容するのではなく、特定の手法に限って使用している。例えば、地震が頻発する日本において、壁面と躯体を離す工法は合理性に欠けるとして、「自由な平面(plan libre)」と「自由なファサード(façade libre)」の手法を否定的に捉え、また、三沢浩が指摘するように、「水平横長窓(La fenetre en longueur)」と「ピロティ(pilotis)」は技術的な問題から使用が限られている。つまり前川國男は、西欧近代建築語彙を受容することの重要性を唱え続けながらも、日本に受容すべきでないものは明確に示している。しかしながら、「屋上庭園(toit jardin)」に限っては、設計活動を通して断続的に計画し続けていることに着目したい。

以上要するに、前川國男にとって屋上庭園は、戦前・戦中、戦後を通して西欧の近代建築手法を実践することができた数少ない手法の1つであり、屋上庭園の通時的な分析より、前川國男の建築制作論としての新しい知見が得られるものと考えられる。

### 2. 研究方法

第1章では、まず近代の日本で作られた屋上庭園を通時的に分析することで、屋上庭園の時代的な背景を考察する。その上で、前川國男の屋上庭園と比較し、日本近代建築における前川國男の屋上庭園の特徴を把握する。

第2章では、前川國男自身が屋上庭園に関して直接的に言及している言説を抽出し、対象作品を分析することで、前川國男の屋上庭園の起源を明らかにする。

第3章では、前章で明らかにした屋上庭園の起源として、ル・コルビュジェの屋上庭園に着目し、それらに対する前川國男の解釈を明らかにする。

第4章では、前川國男の屋上庭園に着目し、前川國男が如

何にル・コルビュジェの屋上庭園を独自の建築手法として応用・展開しているのかを明らかにする。

### 3. 本論

#### (1). 日本近代建築史における屋上庭園

日本近代建築における屋上庭園は、外在的な要因を経ることで通時的に変化している。それらは、経済的要求を満たすための商業的な庭園から、戦時体制下の私的庭園へと変化し、さらに、戦後には合理性を超越してまで屋上に多様性を求めている。一方、前川國男の屋上庭園は高度経済成長期においても建築類型が多様化しておらず、公共建築へと収斂している。

#### (2). 第2章 前川國男における屋上庭園の出自

前川國男が屋上庭園に関して直接的に言及した論考は、概ねル・コルビュジェ作品の屋上庭園を肯定的に捉えた批評である。そのため、前川國男の建築作品における屋上庭園の出自は、ル・コルビュジェの屋上庭園であることが推測できる。

#### (3). 前川國男による屋上庭園の解釈

ル・コルビュジェの屋上庭園に対し、前川國男はサヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)の2作品のみに着目している。なお、サヴォワ邸に関しては、形態的な特徴にさほど関心を寄せず、空中庭園と屋上庭園が段状に連続する半屋外空間全体に着目し、同時に屋内居室との視覚的な連続性や周辺環境への眺望にも着眼を置いている。一方、マルセイユのユニテ・ダビタシオンに関しては、構成要素の彫塑的形態や共同施設の多様性に関心を示しており、作品毎に異なる主題を捉えている。

#### (4). 前川國男による屋上庭園の実践

前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容は、第二次世界大戦後に顕著に現れる。戦後第一期(1946-1950)は、サヴォワ邸の屋上庭園に設けられた構成要素の形態的な特徴を直接的に参照し、また、戦後第二期(1951-1960)には、ユニテ・ダビタシオンの屋上庭園に配された有機的な形態を、抽象化・幾何学化することで、応用している。さらに、戦後第三期(1961-1986)には、サヴォワ邸で用いられた段状の空間構成を自身の屋上庭園へと応用することで、公共建築の屋上庭園に、屋内外の視覚的な連続性や多様な散策動線を付加している。加えて、段状の構成は次第に地上とも接続され、次第にエスプラナードと呼称付けられた屋外空間の一部としても取り込まれている。

#### 4. 考察

日本近代建築における屋上庭園は、外在的な要因を経ることで通時的に変化している。それらは、経済的要求を満たすための商業的な庭園から、戦時体制下の私的庭園へと変化し、さらに、戦後には合理性を超越してまで屋上に多様性を求めている。ただし、屋上庭園の主題に関しては、黎明期から重視され続けた眺望が、高度経済成長期にいと簡単に消失する。おそらく、高度経済成長は屋上庭園の多様化をもたらすと同時に、市街地に画一的な建築物を乱立させ、市街地における見るべき眺望の対象を消失させたのだと推測できる。

一方、前川國男の屋上庭園は断続的に計画され続け、設計活動後期になるほどに、実利性や眺望を重視した公共建築へと収斂している。ただし、前川國男の全作品数に対する屋上庭園の作品数は必ずしも多いとは言い難い。高温多湿な日本の気候条件下で屋上庭園を計画することは、耐久性や維持管理の著しい低下に直結したのであろう。事実、前川國男の屋上庭園において、環境負荷低減や衛生という西洋近代における屋上庭園の主題は、どの時期に関しても希薄である。つまり、前川國男はある程度の施工費用が見込め、また精度の高い施工が可能な公共建築に限って屋上庭園を設けている。

なお、前川國男が屋上庭園に関して言及しているのは、ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) が設計したサヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)の2作品であり、いずれも前川國男が直接訪れたことのある屋上庭園である。さらに、前川國男が自身の屋上庭園を計画する際に参照したのもまた、サヴォワ邸とマルセイユのユニテ・ダビタシオンの2作品であった。つまり前川國男は、自身の体験の中で享受した屋上庭園を、自身の作品へと置換していると推測できる。

#### 5. 結論

前川國男は屋上庭園の制作において、一貫して自身が体験したル・コルビュジエ作品に着眼し続け、設計活動後期になるほどに、形態が主張することのない空間構成そのものとして応用している。

前川國男は周辺環境への眺望が消失する高度経済成長期において、屋上庭園にル・コルビュジエから受容した「段状の空間構成」や「屋内居室との視覚的な連続性」を付加し、また登降の行為を通じて新たな眺望を生み出すことで、それまでの日本にはない公共性を付加させようと試みている。また一方で、段状の構成を地上にまで延長させ、カルーゼル広場の持つ周辺環境との連続性を付加することで、エスプラナードという新たな公共空間をも創出している。

それらは、いずれも時代毎の社会的な課題に対する前

川國男の解決策であり、前川國男はル・コルビュジエの私的な屋上庭園の空間構成を、日本の公共建築へと置換することで、独自の手法として読み替えている。

要するに、普遍性や合理性を造形理念とするモダニズムの潮流の中において、前川國男はル・コルビュジエの屋上庭園に独自の公共性を加味し、再び大地と接続させることで、周辺環境と建築とを流動的に調和させている。前川國男が屋上庭園やエスプラナードで探求し続けたこの公共性は、敷地が狭隘な日本において、また、建築の密集化が進む現代においても、建築と周辺環境を連関させる手法として再評価できるであろう。